

「地域らしさを描く地図帳」製作に関する研究

埴淵知哉 東北大学大学院環境科学研究科

1. はじめに

1-1. ポートランドらしさ (Portlandness) を描く地図帳

米国西海岸に位置するオレゴン州ポートランドは、2010年代から「全米一住みやすい街」として日本でもよく知られる存在となった。学術的・政策的な観点からも、都市デザインやまちづくり、地域活性化、交通、環境などの面で注目を集め、多くの研究者や実務家の関心を惹きつけてきた(吹田 2010, スペック 2022, 畢 2017, 宮副・内海 2017, 山崎 2016)。なかでも、ポートランドの中心部付近に位置するパール地区 (Pearl District) は、かつての荒廃した倉庫街を再生させ、多くのアートギャラリーや飲食店、そして移住者を集めてきた「成功例」として有名である(山崎 2016, Johnson 2022)。コンパクトシティに関連する都市成長境界線や、自動車依存からの脱却を意図した歩行者・自転車に優しい都市デザインが高く評価される一方、急激な人口流入等によるジェントリフィケーションの進行は近年のポートランドにおける大きな課題となっている(池田 2018, 畢 2020, 佐々木 2020)。

このような様々な顔をもつ街を表情豊かに描いた *Portlandness: A cultural atlas* (Banis and Shobe 2015=2018, 邦題『ポートランド地図帖—地域の「らしさ」の描きかた』) は、「地域らしさ」をグラフィカルに物語る地図帳である。同書の著者らはそれを *Cultural Atlas* とよんでいるが、狭義の文化的事象にかかわる地図帳という意味ではなく、それ以外の対象を含め、地図を中心に広い意味で人と場所のつながりを描いた視覚表現の集まりといえるものである。何が「ポートランドらしさ」を構成するのか、それが地図としてどう表現されているのか、同書の内容から一部を抜き出して簡単にみてみよう。

Portlandness では序文に続いて3つの「オープニングマップ」が掲載されている。最初のものである「間取図でみるポートランド」(図1)は、同書(原書)のカバーデザインにも利用されており、最も印象的な「地図」の一つといえる。一見すると間取図のようなこの地図は、都市を家、地区を部屋に置き換えて描いたものである。都心に位置するパイオニア・コートハウス・スクエアは「ポートランドの居間」として知られる。これを発想の基点として、地図には他の多くの地区がバルコニーや書斎、子ども部屋、離れといった様々な部屋に割り当てられ、大まかにレイアウトされている。むろん、縮尺や形状に関して正確なものではない。ただしまったくの空想とも異なり、ポートランドという都市が個性ある場所の集まりとして成り立っていることを想像力豊かに物語る地図である。

イントロダクションに続いて、「都市の景観」「過去と未来」「自然と野生」「都市の見方」「ソーシャル・リレーション」「フードとドリンク」「ポップカルチャー」という章構成のもと、多種多様な地図とインフォグラフィック、文章が必ずしも統一感なく並び、ポートラン

ドラしさをめぐる様々な見方がグラフィカルに描き出されていく。その中には、クラフトビールやフードカート（屋台）のようないかにも「ポートランドらしい」項目から、街路名の歴史や過去の都市計画、ジェントリフィケーションといった社会的なテーマ、匂いや音といった五感を使ったもの、あるいは子どもが描いたメンタルマップのような地理学では馴染み深いものまで、数多くの内容が含まれる。

例えば、ある一人の個人的なサウンドスケープを描いた「街の喧騒」（図 2）は、一見して地図とは判断しづらいアート風の作品であるが、そこには音の大きさ、種類、様相などが線の振れ幅、色彩、オノマトペなどによって描かれており、豊かな音の体験が「地図」として表現されている。「ミッション・インビジブル（監視を避けて）」（図 3）と題されたページには、都心部にある膨大な数の防犯カメラの分布と、それを避けて駅から大学へと向かうルートが示される。この地図が直接表現しているのは防犯カメラの分布という事実であるが、それが伝えるのは「自由（リベラル）」で「住みやすい」（治安が良いこともその一因と考えられる）ポートランドのイメージとは異なり、監視の目の中での暮らしが定着している街の姿でもある。「ドーナツの穴の外側をめぐる物語」（図 4）では、ポートランドの形状に似せて作られたドーナツをメタファーとして、真ん中（都心）の穴ではなく外側（縁辺）に焦点を当てた諸地域の物語がそれぞれの地図とともに展開される。

このように、同書には多彩なトピックを不統一な形式・表現で描いた地図が多数含まれている。しかし一冊の地図帳としてみると、雑然と並ぶグラフィックと文章の中にポートランドという街、そしてその街で暮らす人々の個性が浮かび上がるような印象を受ける。歴史や社会問題を学術的に扱う一方で、コーヒーやサッカーも題材となる。また、各ページに解説文はあるものの短いものが多く、文体も平易であるため、専門書や学術書という印象は受けにくい。実際に、*Portlandness*（原書）はこれまでに Amazon.com で 100 件近いレビューを獲得し、現地では書店のみならず、雑貨屋や土産物店、スーパーマーケットにも置かれるなど、広い読者層に読まれていることが窺える。著者ら自身もアカデミックとポピュラーなスタイルの両立・融合を意図しているが、その試みは成功しているようにみえる。

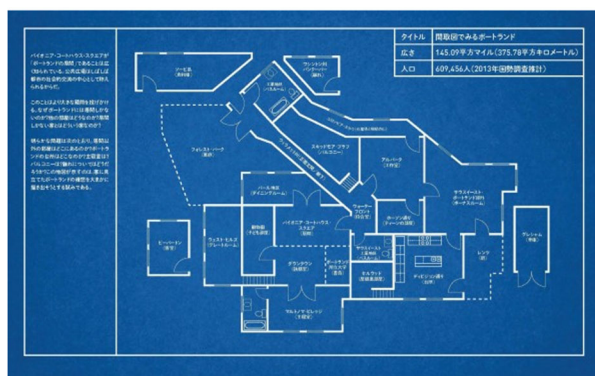


図 1 間取図でみるポートランド

出典：Banis and Shobe (2015=2018)

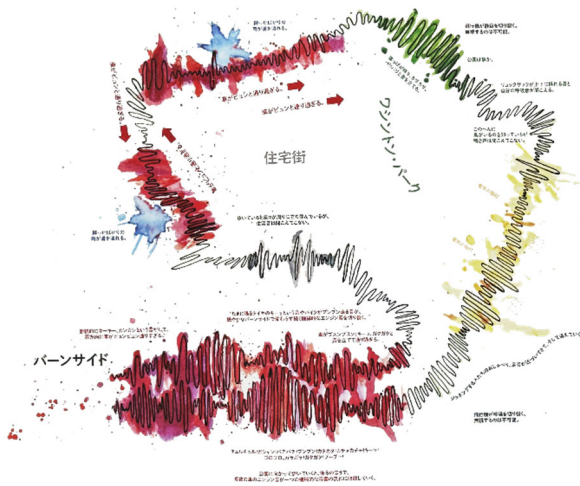


図2 街の喧騒

出典：Banis and Shobe (2015=2018)



図3 ミッション・インビジブル (監視を避けて)

出典：Banis and Shobe (2015=2018)



図4 ドーナツの穴の外側をめぐる物語

出典：Banis and Shobe (2015=2018)

1-2. Cultural Atlas の展開と制作をめぐる課題

Portlandness は非常にユニークな地図帳であるものの、その着想に影響を与えた、広い意味でコンセプトを共有する書籍は存在する。例えば、著者の一人であるショービーはポートランド州立大学でのプレゼンテーションにおいて、*Everything Sings* (Wood 2010)、*Infinite City* (Solnit 2010)、*Mapping Manhattan* (Cooper 2013)、*Mission Possible: A neighborhood Atlas* (地図プロジェクト) を、彼ら自身のお気に入りの Cultural Atlas として挙げている (Shobe 2015)。他方で、*Portlandness* に着想を得て各地で同様の地図帳を制作する試みも広がっている。同書から派生した姉妹書と位置付けられる *Seattleness* (シアトル: Hatfield et al. 2018)、学生らが授業を通じて制作した Cultural Atlas である *Curious City - In, Out, Above, Beyond* (セントポール: Nepp 2019a) および *Meandering Minneapolis* (ミネアポリス: Nepp 2020)、また、ドイツのテュービンゲンを対象とした *Cultural Atlas of Tübingenness* (Kühne et al. 2022) などの刊行も近年相次いでいる。2021 年には、ショービーとバニスらによる続編として、サンフランシスコ、ポートランド、シアトルの三都市を比較した *Upper Left Cities* (Shobe and Banis 2021) も刊行された。

このように、*Portlandness* に関連する地図帳はすでに一定の広がりを見せている。ただし、既刊の地図帳はいわば完成された作品集であり、その制作方法については書籍の中で詳しく説明されていない。この地図帳がいかにして構想され、議論され、描かれていくのかというプロセスを、完成版の地図帳から遡って読み取ることは困難である。そもそも、*Portlandness* 一冊の中だけを見ても、テーマや着眼点、資料、デザインなどは様々であり、地形図や統計地図にあるような何らかのルールや基準に基づく統一性をそこに見出すことも難しい (図 1-4 参照)。したがって、Cultural Atlas としてのコンセプトや方向性といった広い意味での類似点は窺えるものの、制作方法を体系的に読み解くことは不可能といえる。この自由度の高さが Cultural Atlas の魅力を生み出しているのは確かであるが、より多くの都市や地域にこの地図帳制作を展開するためには、手引きとなるような中間的なステップも必要であろう。

1-3. 本研究の目的と方法

このような問題意識から、本研究は Cultural Atlas の制作方法における要点を整理するとともに、多くの都市・地域での制作に際して参考となる資料を作ることを目的とした。もちろん、ここで目指すのはマニュアルのような厳密な基準作りではなく、緩やかな方法論 (考え方、調べ方、描き方の指針) をわかりやすく整備することである。以下の章では、まず Cultural Atlas の定義やねらいを読み解くところから始め、これがどのような特徴や意義をもつのか、そしてどのような点に留意しつつ独自の (すなわち自分の街の) Cultural Atlas を構想し制作すればよいのかを順に議論する。そのうえで、実際に日本の都市を対象としてこの地図制作を実践し、制作したいくつかの地図およびその解説、またその手順をわかりやすく形式化したガイドなどを紹介する。以上を通じて、Cultural Atlas の意義をより良く理解するとともに、

日本の各都市・地域での地図帳づくりに貢献することが本研究の目的である。

Cultural Atlas に関する定義やねらい、多様な地図制作において用いられた視点や方法については、まず既存の地図帳 (Banis and Shobe 2015=2018, Shobe and Banis 2021) を主な資料として内容を整理することを試みた。Portlandness および Upper Left Cities の出版に際して、彼らおよび他の執筆協力者たちが複数のプレゼンテーションやトークイベントで制作過程・内容についても紹介しているため、その動画も補助的な資料として利用した (Shobe 2015, Shobe et al. 2021)。加えて、Cultural Atlas の特徴や重視する方向性、また発表内容には含まれない制作過程の詳細などについては、ポートランド州立大学のショービー氏とバニス氏に対するオンラインでの聞き取り (2020年6月、10月、2021年3月) および補足的なメールでの質問のやり取りを断続的に実施した。さらに両氏からは、実際の地図制作やそのガイド作成に関しても適宜フィードバックを得ることで、方法の整理と制作の実践の両面において協力を得た。

2. Cultural Atlas とは？

制作方法に先立って、ここで Cultural Atlas の定義あるいは特徴について整理しておきたい。Cultural Atlas とは何か？という点については、Portlandness の序文で叙述的に示されているものの、Upper Left Cities の中ではあまり詳しく触れられていない。しかし、Upper Left Cities を紹介するプレゼンテーションでは "What is a cultural atlas?" というスライドが用いられ、そこに以下の4点が明示されている (Shobe et al. 2021)。

1. 場所に対する新たな理解、新しい地図学をもたらす
2. 同じ場所に付与された異なる意味を探る
3. 人々の地理的想像力を刺激する
4. 包括的であることを意図しない

1点目は、伝統的・標準的な地図帳との対比を念頭に、Cultural Atlas が正確な道案内や地理情報の表現を目指すものではなく、新たなものの見方を提供するものであるとの意図が示されたものと理解できる。2点目は、そういった見方は一つではなく、その地域とかかわりをもつ多数の人々によって示されるのであり、同じ場所であっても様々に付与された意味、異なる物語 (人と場所のつながり) に注目するという視点が強調される。3点目は、Cultural Atlas が読者に対して与える影響面に関する定義であり、正確な地理情報の表現や伝達よりも、地理的想像力あるいは好奇心に訴える効果を重視していることがわかる。そして4点目は、Cultural Atlas が一般的な地図に無いようなテーマや有名ではない地域を重視するとしても、それによってあらゆるテーマやすべての地域を網羅することを意図しておらず、あくまで特定の人々と場所のつながりのコレクションであることを強調している。

Cultural Atlas では、地図が場所そのもの、あるいは客観的事実を映し出すのではなく、それが人々による場所の見方を表し、そこで紡がれたストーリーを語るという側面が強調される (Banis and Shobe 2015=2018, Shobe 2015)。別の言い方をすれば、「A地点からB地点へと向かうのにほとんど役立たないが、数々の歴史や隠れた秘密、そして私たちにとっての特別な場所を探索するのに有用」(Nepp 2019a: vii) なものである。とくにポートランドに対しては、冒頭にも述べたような様々な側面の「成功例」として、また"Keep Portland Weird" (変わり者のままでいよう) という街のスローガンを誇張したような「ポートランドらしさ」が想起されやすいなか、著者らはこうしたステレオタイプなイメージに異議を唱える方法で都市を表現することに取り組んでいる。こういった意図は、真ん中(都心)が空っぽであるというドーナツ(図4)のメタファーにも見てとれる。

また、包括的でないということは、出版された地図帳が完全版ではありえず、常に新たなバージョンの可能性が開かれていることも意味する。あるページを見た人がそれに異議を唱え、今までとは違った視点で街を歩き、また新たなページが地図帳に追加されていく。そういったプロセスを通じてより多くの人々が参加することで、Cultural Atlas はより豊かなものになっていくと考えることができる。個々の地図には様々な異なる見方が表現され、それらが一冊に(雑然としつつ)まとまることで、いかにその都市や街が多様な経験を与えてくれるのかが視覚化される。この点で、Cultural Atlas は地図「帳」であることにも重要な意味があると考えられる。

さらに、表現技法の多様性も大きな特徴の一つに挙げられる。標準的な主題図のルールに則った地図もある一方で、GIS とデジタルデータを駆使した地図や、手描きのイラストに近いような地図、またインフォグラフィックを活用した地図、さらにはアート作品のような地図まで、実に多種多様な表現が用いられる。結果として、Cultural Atlas に含まれる個々の地図にはほとんど統一性や一貫性はなく、一見しただけではまとまりのある地図帳として認識しづらい。そういった異なる表現技法の混在を許容する点も、上述の Cultural Atlas をめぐる方針を反映したものであると考えられる。Portlandness の著者らは他にも、想像力を刺激するために電子媒体よりも紙媒体の印刷物であることを重視し、またアカデミックとポピュラーなスタイルの両立ないしは融合を意識的に実践している。

ここで、標準的な地図帳と Cultural Atlas を対比させると、やや単純ではあるものの次のように特徴を要約できよう。前者が測量や調査に基づく事実を正しい地理情報として伝達することが目的であるとする、後者は想像力や五感を用いて人と場所のつながりをより生き生きと豊かに物語ることに挑戦する。縮尺や凡例、階級区分など標準的な一般図・主題図に求められるルールは必須ではなく、専門家でなくとも地図作りに参加しやすい。何をもちょう良い地図(帳)であるとするのかも、正確性・客観性・包括性などを基準とするわけではなく、それがどれほど人々の地理的な想像力や好奇心をかき立てられるのかを重視する。目的地に向かったり、有用な情報を得ようとしても役には立たないかもしれないが、自分と同じ街に暮らす人々が、同じ場所をどれほど違った見方でとらえているのかを目に見える

かたちで実感させてくれる。

むろん、ここで述べた Cultural Atlas の特徴は、厳密にそれを分類するための基準ではなく、Cultural Atlas から読みとれる類似性を列挙したものに過ぎない。厳密な定義を与えることは困難であり、またその必要性も乏しいように思われる。そのうえで、こういった Cultural Atlas の諸特性をあえて簡潔に表現するならば、「人と場所のつながりを物語るグラフィカルな空間表現の集まり」、またさらに短く意識すれば「地域らしさを描く地図帳」とよぶことが可能であろう。当然ながら、これはステレオタイプな地域の個性を意味するものではなく、想像力や観察力、思考力を生かして自由に作られる千差万別の地図を集めることで、結果として地域の「らしさ」を浮かび上がらせるものと位置付けられる。

なお、Cultural Atlas には独自の視点やねらいがあるものの、少なくとも個々の地図についていえば既存の様々な地図と重なる部分も小さくない。GIS を用いた地図やデータマップ、メンタルマップ、インフォグラフィックなどは Cultural Atlas でも頻繁に使用されており、地理学や地図学、情報デザインとの関連性が強い。他にも、(デジタル) ビッグデータの地図化 (Cheshire and Uberti 2014) や多種多様なアートマップ・イラストマップ (Berry and McNeilly 2014; Desclaux-Salachas 2017)、あるいは手描き地図の制作 (手描き地図推進委員会編 2019) などとはそれぞれ重なる部分がある。学生や子どもによる地図づくりやマップコンテストなどとも制作実践における類似点がありうる。Cultural Atlas の場合はこれらが多くと重なり合いつつ、一冊の地図帳であることを重視し、その中で様々な人と場所のつながりを物語るというねらいを中心に置くものと位置付けられるだろう。

3. 制作方法の整理

ここでは、先に見た Cultural Atlas の特徴を踏まえたうえで、そういった特徴を生み出すことになる制作方法の要点を整理してみたい。繰り返し述べてきたように、Cultural Atlas に含まれる個々の地図については自由度が極めて高く、厳密に何らかの基準に照らして収録の可否が判断されるようなものではない。したがって以下では、制作の方向性あるいは指針として重視すべきであると考えられる三つのポイント (以下 3-1、3-2、3-3) を指摘し、それらを軸として制作プロセス全体を大まかに俯瞰する枠組みを提示したい。

3-1. 「自己中心的」な着想

第一に、個々の地図のテーマや表現方法は自由であるため、まず自分にとってその都市／地域らしさを感じさせるものは何か、という感覚が出発点になる。これは、地図が場所そのものではなくストーリーを語るもの (Banis and Shobe 2015=2018) という考えを反映した方針といえる。地域らしさの基準が客観的である必要は無く、自分にとってその地域が特徴的であると感じられる要素であれば地図の題材になりうる。それが建物などの物的なものでも、歴史のような不可視なものでも何でもよい。「私にとってここが〇〇らしいと感じられ

るのは、なぜなのか？」という問いが出発点であり、自身の感覚を拠り所として地域とのつながりを形作っている題材を選択することが基本となる。この逆に位置するのが、しばしばメディアで注目されるようなステレオタイプな都市イメージである。冒頭で述べたように、ポートランドは各方面から注目を集め、それに付随するステレオタイプなイメージも普及した。そういった表面的なポートランドらしさも確かに街の個性の一面を表してはいるものの、*Cultural Atlas* では人それぞれに異なる場所の経験や感覚がより重視される。

このことは、*Portlandness* の「ポートランドらしき指標」を取り上げたページで印象的に示されている。そこでは、学生たちがポートランドの特徴として挙げた様々なもの（例えば、リベラルさ、環境意識の高さ、ブルワリーなど）が、何らかの代理指標をもとに統計地図として描かれる。それらを重ね合わせた合成地図が、「ポートランドらしきの総合得点」を描いたデータマップである。得点が最も高いのは都心部であり、したがってそこが「最もポートランドらしい場所」といえるはずである。しかしここで著者はこの地図に対して疑問を投げかける。ポートランドで最もポートランドらしい場所があるとは、一体どういうことなのか？私たちは都心部で起こっていることのみを誇張して、ポートランドらしさを非常に偏った見方でとらえているのではないか？という問いである（Shobe 2015）。このように、表面的なイメージにとらわれない、いわば「自己中心的」な着想こそが *Cultural Atlas* の起点としては重要であるといえる。

ただし、まったく白紙の状態から頭の中だけで地域らしさの感覚を思い描くことは容易ではない。自分にとっては日常の一部であり当たり前の風景である地域を、すべて意識化することにも限界があると思われる。そこで、何らかの手がかりとなるような工夫として、(A) 既存の *Cultural Atlas* からヒントを得る、(B) 内部／外部の視点を組み合わせる、(C) 意図的に制約を課して都市・地域を見直すといった手段が考えられる。

A は、すでに紹介したような既刊の *Cultural Atlas* を参考に、そこで描かれている様々なトピックや地図表現を自分の地域に当てはめてみることである。*Cultural Atlas* の目的自体にも読者の地理的想像力を刺激することが含まれており、多種多様な地図は「これを○○で作ったらどうなるだろうか」と考えさせるものが多い。あるいは「自分の地域であればこういう地図もあり得る」というような発想の展開にもつながりやすいだろう。

B は、移動歴や居住歴によって地域に対する見方が異なることを利用する方法である。特に、長年住み慣れた人にとっては当然のものが、外から来たばかりの人にとってはそうではない、という例は数多い。そういった立場の異なる住民間の交流は、各々が感じる地域らしさを意識化する機会となり、同じ場所に付与された異なる意味を探ることを促進する。

C は、例えば聞こえてくる音や匂いのみ注目し、普段は一体のものとしてとらえている場所の諸要素をあえて切り離すことで、日常では気づきにくい地域の側面に目を向ける取り組みである。そうすることによって、逆に、何がその場所をその場所らしく感じさせているのかを認識しやすくなる可能性がある。

3-2. 多様な制作方法（想像・五感・知識・意匠）

第二に、刊行された Cultural Atlas の多くは描かれた内容によって分類・構成されているものの、制作時には方法に基づく分類のほうが有用であると考えられる。地図の対象となるトピックは無数に存在しており、実際これまでに刊行された Cultural Atlas の内容を集めるだけでも相当な数になる。これらは書籍の中では章ごとに「都市の景観」や「ポップカルチャー」などとしてグループ化されているものの、個々の地図に統一性はなく、自身の着想と近いトピックを見つけたとしてもそれが制作方法の参考になるとは限らない。テーマごとに章が並ぶ構成は書籍としては読みやすいものの、制作の枠組みとしては有効に機能しづらいと思われる。

そこで、制作方法の観点から有効な枠組みを検討し、地図の対象となるトピックではなく、地図を作るための素材（資料・情報源）を基準として分類を設けることにした。具体的なカテゴリとして設けたのは、「想像」・「五感」・「知識」・「意匠」の4つである。既存の Cultural Atlas に含まれる多くの地図は、例外も一部あるものの、基本的にはこれら4つのうちいずれか（または複数）のレンズを通して、人と場所のつながりを物語っているとみなしうる。これは地図に描かれる対象ではなく、何を通じてその場所と自分とのつながりを意識化・視覚化するのかという「方法」を基準とした分類である。例えるならば、イタリア料理や中華料理といった料理の分類ではなく、野菜や肉といった材料、あるいは「炒める」「煮る」といった調理技法による分類に近いといえる。

「想像」に基づく地図制作は、空想・類推・認知などを通じて思い浮かべた地域らしさを描くものであり、自らの「頭の中」が情報源となるものである。間取図に例えて表現した地図（図1）はその一例であり、もし都市が家だとしたら？という想像に基づいた地図制作といえる。Cultural Atlas にはメンタルマップも多く含まれるが、これも未知で不確実な部分を含む空間イメージに基づくものとして、広義の想像に基づく地図に分類できる。

「五感」に基づく地図は、視覚・聴覚・触覚など自身の身体・感覚器官を介して経験した地域らしさを描くものであり、個人的なサウンドスケープを描いた地図（図2）がこれに該当する。これらの情報は何らかの客観的なデータとしても収集可能であるが、Cultural Atlas においては自分にはどう見えたか・聞こえたかといった感覚が重視される。

「知識」に基づく地図の例は防犯カメラの分布（図3）であり、これは一見すると事実を示しただけの地図にも見える。ただし既述のように、この地図が語るのは「自由」で「住みやすい」とされる街のイメージに反する監視の多さであり、事実そのものではない。五感とは逆に、その場にただいるだけでは見えづらい場所の特徴を、歴史や統計、社会背景などの知識を介して物語る方法といえる。

そして「意匠」はやや趣を異にする分類であるが、形状・色彩・模様などのデザイン要素を活用して地域らしさを描く方法といえる。これに該当するのは、ドーナツの形状を用いて真ん中（都心）の穴ではなく外側（縁辺）への注目を促した地図（図4）である。また、地図の対象そのものを画材とするようなデザインマップ（例えばビールの泡で醸造所の分布

を描くなど)も、広い意味で意匠に基づく地図に含まれる。

3-3. 多人数の参加

第三に、Cultural Atlas は地図「帳」であり、個々の多様な地図作品が集合することによって地域らしさを異なる角度から浮かび上がらせるねらいをもつ。個々の地図の多様性をもたらすのは人々の「自己中心的」な感覚や経験に基づく多様な視点であり、したがって一人ではなく異なる見方をもつ多数の参加が鍵となる。これは、同じ場所に付与された異なる意味を探るという Cultural Atlas の目的にも通じる点である。また、自分とは異なる見方をもった地図(およびその制作過程)に触れることで、共感を覚えたり時に意義を唱えたりしながらも、地域に対する多様な視点やかかわり方を理解しやすくなるだろう。多人数の参加を通して多種多様な地図が作られる都市・地域は、それだけ人と場所のつながりが豊かであるともいえる。

実際に *Portlandness* および *Upper Left Cities* にはそれぞれ 40 名以上が制作に参加しており、そこには研究者や地図制作者、グラフィックデザイナー、また複数の大学の学生・院生および卒業生などが含まれる。制作には構想・企画から調査や資料収集、地図(グラフィック)の制作、文章や補足資料(写真やグラフなど)の作成など多くの段階があり、数年以上の期間に多数のミーティングを開催してプロジェクトが進められている。このような多数の参加者が様々な観点から地図制作に加わることが、全体の視野を広げることに貢献するものと認識されている。筆者が *Upper Left Cities* 制作のミーティングに参加した際にも、印刷された各ページのドラフトを机の上に広げ、各自が飲食しながら自由に意見を交換したりコメントを書き込んだりするなど、カジュアルな雰囲気の中で作業が進められていた。これらは単なる作業分担というよりも、Cultural Atlas の内容をより豊かなものとするのに不可欠な過程であると考えられる。

この点で、地元だけでなく多様な出身地の人々が集まる大学は Cultural Atlas 制作において大きなアドバンテージをもつ。マカレスター大学のアシュリー・ネップは、ミネソタ州セントポールやミネアポリスを対象に、大学の授業期間を通じて実質的に 13 週間で学生それぞれが地図制作に取り組んだ成果をまとめ、Cultural Atlas を作り上げている(Nepp 2019a, b, 2020, 2021)。*Portlandness* 同様、原則として一つのテーマを見開き 1 ページに収めることとし、学生たちはそのページに描くテーマの選択から資料収集(インタビューなども含む)、GIS や描画ソフトウェアによる地図制作と説明文の執筆までのすべてを体験する。学生にとっては自由度の高い課題である一方、最終的なゴールは明確であり、調査やソフトウェアなどのスキル習得にもつながる。また、自分が制作した 1 ページがより大きな成果物(地図帳)の一部となるため、モチベーションも維持しやすい。このように、Cultural Atlas 制作においては多数の参加を促す仕組みや工夫も重要になる。

3-4. 制作プロセスの枠組み

Cultural Atlas の制作方法に関するここまでの議論の要点を整理すると、図 5 のようになる。①「自己中心的」な着想の段階では、自身の感覚や経験から出発し、都市・地域とのつながり（ストーリー）を物語る題材を様々な工夫とともに探し出す。次に、②多様な制作方法のうち、想像・五感・知識・意匠のいずれかに重点を置きつつ、実際に地図に含まれる情報・データや素材を集める。そして集めた材料をもとに地図を描き、図表・写真および文章も加え、自身にとっての地域らしさを描く一枚を制作する。またその制作過程において③多人数が参加することで、意見交換しながら様々な異なる見方・ストーリーを一冊にまとめあげていく。こうして制作された Cultural Atlas は、作者・読者の好奇心を刺激し、それがまた次のバージョン、あるいは別の都市・地域の地図制作につながるという一連の枠組みとして整理できるだろう。

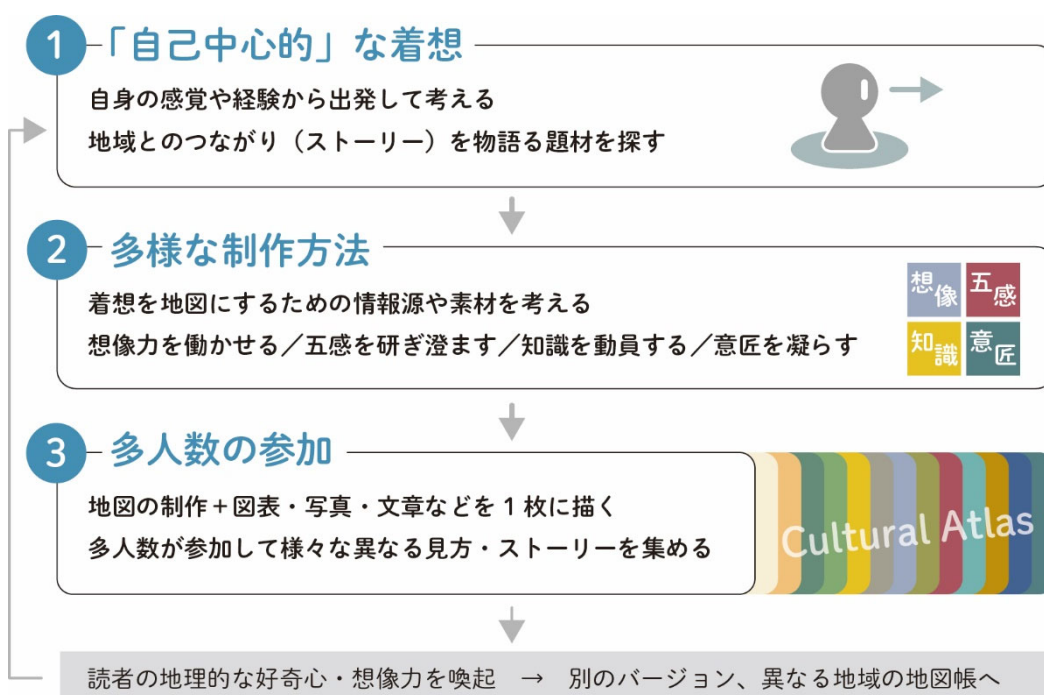


図 5 Cultural Atlas の制作枠組み

4. 制作事例

以下では、実際に制作した地図の事例を紹介する。筆者および協力者が「自己中心的」な着想に基づき、様々な制作方法を採用しつつ、多人数の参加を通じて日本での Cultural Atlas 制作を試みたものである。ただし、既述の制作方法は以下に紹介する地図制作を進めながら同時並行で整理したものであるため、すべてがそれに則って作成されたわけではない。また、

ここで紹介するのは個々の地図であり、一冊の地図帳として編集・印刷される Cultural Atlas そのものとは異なる。地図についても、最終的にはグラフや写真、詳しい解説などと組み合わせページを構成することが望ましい。したがって以下に示すのは、Cultural Atlas の中心となる地図の制作過程とその結果を断片的に紹介するものである。なお、一部の地図制作には「『地域らしさ』を描く地図帖制作プロジェクト」の参加メンバーによる議論・作業が反映されており、その制作協力者名は謝辞欄に記載した。

4-1. 「仙台らしさ」を描く

2020 年に仙台市で暮らし始めた筆者にとって、都心でも比較的身近に存在する緑や川、地形の起伏といった「自然」を感じられることは「仙台らしさ」の重要な要素となった。定禅寺通りの街路樹や青葉山の丘陵地など、都心から少し歩いて辺りを見渡せばどこかに緑が見える。都心のすぐそばを蛇行する広瀬川は水の流れを感じさせるとともに、それが形成した河岸段丘は地形の起伏や高低差のある特徴的な景観を街の各所に出現させている。こうした自然に囲まれた都心の風景は今では日常に溶け込んだものとなったが、この都市に移り住んだ当初のイメージとして記憶に強く残っている。これは、その前に住んでいた名古屋市の経験（「名古屋らしさ」の感覚）との対比による部分が大きい。日常の風景に水や緑の存在を感じにくく、自然との距離が遠い、という感覚が筆者にとっての名古屋らしさの一面だったからである。

このような「自然との距離が近い大都市」という感覚を仙台らしさととらえ、これを地図にすることとした。その例として制作したのが図 6 である。この地図には、地形や河川、植生そのものではなく、経験に基づく仙台の「自然」が描かれている。筆者が通う東北大学青葉山キャンパスは丘陵地にあり、地下鉄東西線青葉山駅からのアクセスは極めて良いものの、周りは木々に囲まれた緑豊かな環境にある。そのためか、クマの目撃情報と注意喚起が頻繁に送られてくる。また最寄りの購買施設では、クマよけの鈴とベルが「青葉山の必需品」として販売されている。宮城県はクマの目撃情報を公開しているため、地図にはまずその点分布と密度分布を示した。目撃地点は広瀬川の南西側に多く、青葉山駅のすぐ南西あたりにホットスポットがある。地下鉄駅の徒歩圏内でクマの目撃情報が数多く報告されていること自体、都市と自然の重なりを印象付ける一つのストーリーといえる。

またある時、都心からほど近い広瀬川沿いに位置する西公園で養蜂の社会実験が行われているという記事を目にする機会があった（2020/08/01 河北新報朝刊）。そこで、巣箱からおおよそ 2km を採餌範囲と想定し、西公園から半径 2km のバッファを発生させ、その境界線を地図上に示した（ちなみに巣箱の位置は非公表であるため、バッファは公園のポリゴン外周から発生させた）。ミツバチの採餌範囲には、仙台駅を含む都心部がすっぽりと入っており、ミツバチがその中で採取したであろう蜂蜜が販売されていた。このことは、都市の公園内外に多くの草花や木々があることを意味しており、都心部にも豊かな自然が広がっていることを物語っている。

そして「蜂蜜が好きな熊」というイメージに紐づけて、クマの目撃情報とミツバチの採餌範囲を重ね合わせて一枚に描いたのが図6の地図である。これを見ると、人間活動の中心であるはずの都市において、人とクマ、ミツバチが「共存」している様子が感じられる。青葉山駅近くで働く筆者にとって、この地図は「自然との距離が近い大都市」という日々自らが経験している仙台らしさを可視化したものである。なお、この地図の着想においては筆者の経験以外に *Portlandness* を参考にした部分も大きい。「自然と野生」と題されたセクションには、動植物がいかにして街なかに「侵入」し、街に溶け込みつつ各所で顔を出しているのが描かれている。これらによって得た着想を、知識(事実)に基づいて地図に表現しつつ、想像力を働かせて仙台らしさの一側面を描いたものといえる。

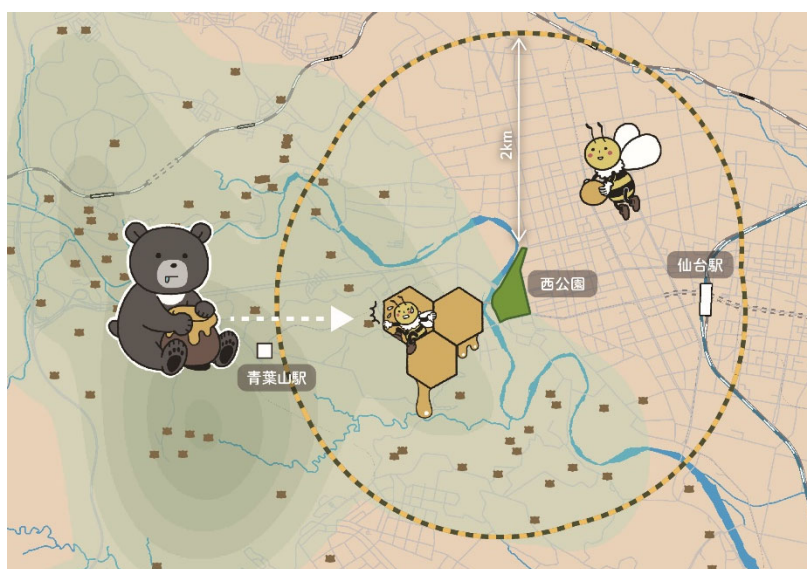


図6 重なり合う都市と自然

資料：宮城県自然保護課野生生物保護班「クマ目撃等情報」(H.24-R.2)

以下では、仙台らしさをテーマとして制作した他の地図の例を並べ、それぞれを簡潔に説明していきたい。まず図7は、図6と同じく仙台らしい自然の一部を構成する要素として、都心近くを流れる広瀬川を題材に描いたものである。ただし、ここでは広瀬川の特徴としていかに蛇行しているかという流路の形状のみに焦点を当て、それを曲線と直線を比較するデザインによって端的に伝えるようなグラフィックを用いた。この「地図」が伝えたいことは広瀬川の正確な位置や流路ではなく、それがいかに曲がりくねっているかということであり、このことが河岸段丘など流域の特徴的な景観を生み出し、仙台の街の広がりやつながりを形作ってきたというストーリーに結び付く。ただしおおよその位置を示すため、各所に架かる橋のポイントを併せて示した。

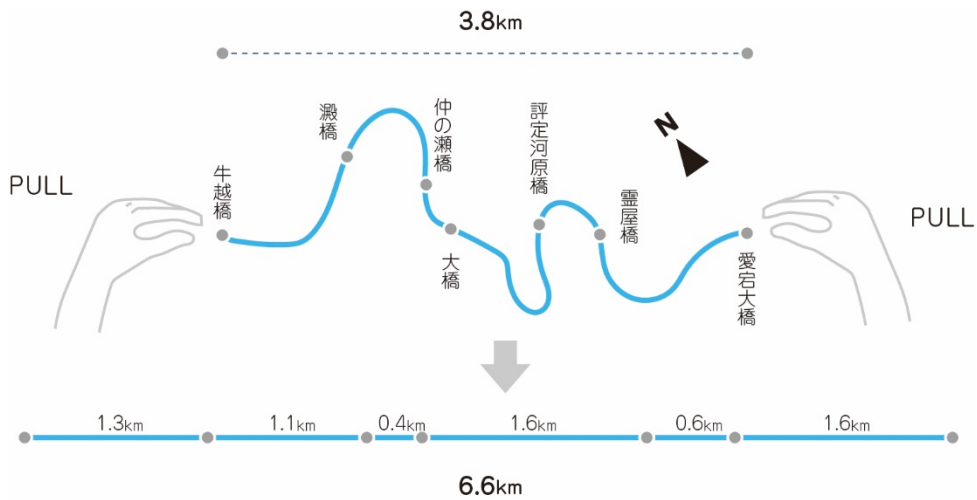


図7 蛇行する広瀬川

続いて図8は、仙台都心における、ある平日午前のサウンドスケープを描いた地図である。あえて聴覚のみを研ぎ澄ませるという制約を課すことで、普段とは異なる新たな街の一面を感じ取ることを意識した。街なかで聞こえてくる音をテーマとした地図は *Portlandness* や *Upper Left Cities* でも取り上げられており、五感を通じて体験する都市の特徴を描くものとなる。ここでは仙台駅付近をスタートして都心部を歩き、各所で聴こえた音を記録してその種類と大きさをイコライザー風に表現した。人の声など「人間」の音がよく聴こえるのは朝市や商店街に限られ、多くの場所は車の往来やクラクションといった「交通」の音に支配されていた。所々では鳥の鳴き声も小さいながら聴こえ、建設工事の大きな音が局所的に響く一方、地下に入ると街の喧騒が消え去り自分の足音に気づかされた。

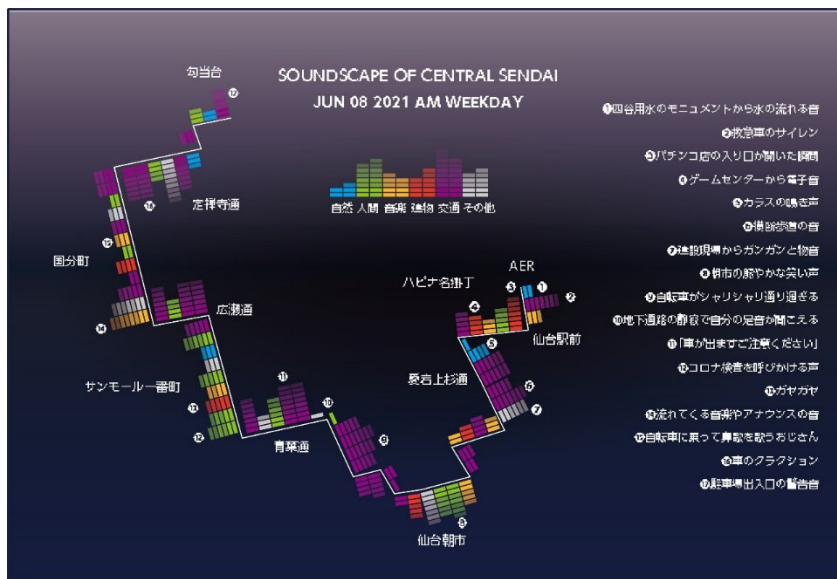


図8 仙台都心のサウンドスケープ

図9は、音以外にも五感を通じて感じ取ることができる都市の要素を、オノマトペによって表現した地図である。オノマトペマップは都市の雰囲気や質を意味する「都市の様相」を表現するものであり（北 2018）、人々が街なかで感じ取っている物事の様子を、擬音語や擬態語を通じて生き生きと描くことができる。ここでは、学生たちが実習の一環として仙台の街なかを歩いて集めたオノマトペの中から特徴的なものを抜き出し、それぞれの雰囲気が伝わるようなフォントとイラストによって多様な感覚を表現した。同じ道や地点であっても、人はそれぞれの感覚で場所を経験している。無機質なものとイメージされがちな都市空間でも、感覚を研ぎ澄ませるとそこに広がる都市の様相を感じ取ることができる。

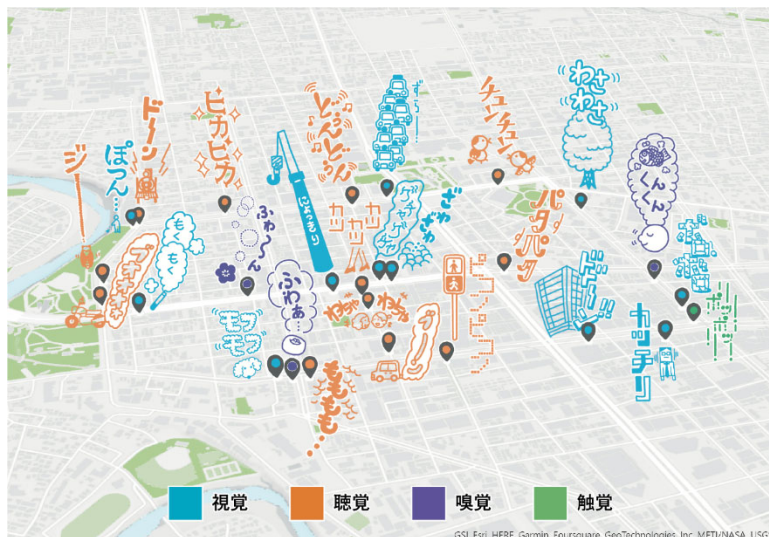


図9 仙台都心のオノマトペマップ

図10に示したのは、一定の基準のもとで計算された「小さい正方形」に近い街区である。色が最も明るいところがそれに該当し、やや暗い色はそれよりも少し大きい街区を示している。「街区の小ささ」はポートランドの歩きやすさを構成する要因としてしばしば取り上げられる。仙台でも格子状の街路網は各所にみられるものの、街路から奥の住宅までを未舗装の私道がつないでいる（その先は行き止まりであることが多い）様子を見るにつれ、それが街区サイズの大きさに由来するのではないかと感じるようになった。それがこの地図を制作した動機である。仙台駅を起点とすると、小さい正方形にあたる街区が多いのは都心からやや外れた西側、あるいはさらに遠く東に位置するのみであり、確かに都心の大部分は該当しない。歴史的経緯までは不明であるものの、五感（ここでは視覚）だけでは十分に知らない街の特徴を知識（道路データとGIS）によって可視化した事例といえる。



図 10 小さい正方形の街区

資料：ArcGIS Geo Suite 道路網 2021、国交通省位置参照情報ダウンロードサービス

図 11 には、仙台都市圏の住民に対する Web アンケート（2021 年実施、20-69 歳、n=2,487）結果に基づいて、「仙台を代表するランドマーク」をイラストマップに表現したものである。ここでは、様々な建造物をフードトラックに例えてイラスト化し、行列が長く連なっているほどそれがランドマーク（目印）として認知されていることを表した。仙台駅や高層建築物が集まる都心部は広瀬川の北東側に位置するものの、人々が認知する目印は南西側にも多く分散している。その最たるものは仙台（青葉）城跡・伊達政宗騎馬像であり、そこには多くの人々が列をなしている。しかしそれ以上に多くの人々は、どこに並ぶでもなく迷っている（「ない」「わからない」などと回答）。リンチ（2007）の言葉を借りれば、目印となるランドマークをもたない仙台は「イメージしづらい」都市だと評価されてしまうだろうか。

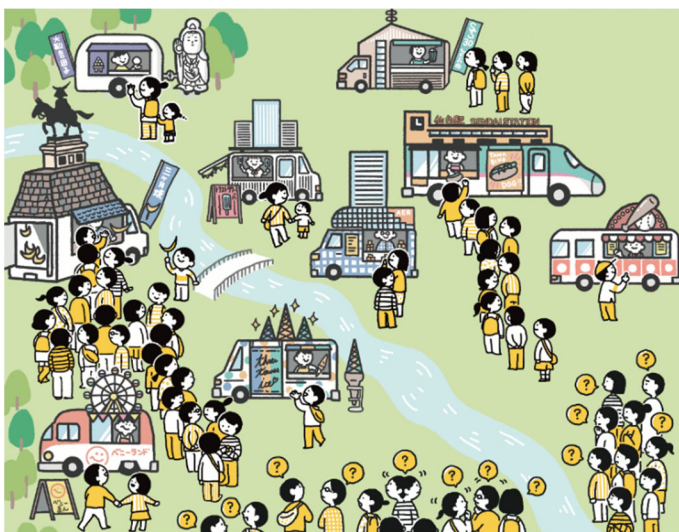


図 11 わかりにくいランドマーク

資料：仙台都市圏居住者に対する Web アンケート

図 12 は、仙台に架空の路線図を構想して描いたものである。類似の地図は *Portlandness* にもみられるが、ここでは実際の地名に基づいている点でやや異なる。この地図の制作にあたっては、参加者が意見を出し合い、仙台の特徴を示す要素ごとに複数の場所を地図上で結んで「路線」を計画した。各路線は比較的良好に知られた特徴を反映しており、例えば「杜の都線」は緑地や樹木に縁のある地域を経由し、荒浜駅で「震災復興線」と接続する。他にも「学都」や「楽都」、「政宗」などある種のステレオタイプな仙台らしさが並んでいるが、この路線図には仙台駅が存在しない。ポートランドとは異なり、「仙台らしさ」は狭い都心部を超えて海や山に向かって拡がり、各地に分散している。そのようにこの地図の制作者たちが考えた結果といえるだろうか。



図 12 路線図で結ぶ仙台らしさ

図 13 には、針金を素材に用いて描いた仙台都心部の街路網を示した。針金という素材自体は仙台らしさと直結しないものの、接続性の高い街路構造をもつ都心付近が上手く結び付いた (wired) 様子を表現しようとしたものである (ただし、実際の手作業では「結ぶ」という作業が困難であったため未完成)。旧城下町の範囲には T 字路など接続性を低くする街路網の特徴が残存していたものの、戦後復興から高度経済成長期の自動車社会化への対応によって、都市の街路網はより接続性の高いネットワークへと変化した。つまり、仙台はよりつながりのある街へと変化を遂げたのである。なお、下地に見える色は接続性指標 (スペースシンタックス理論による) に対応しており、赤が最も高く、緑、青の順に低くなる。



図 13 針金で結ぶ仙台の街路網

4-2. それ以外の事例

以下では、仙台以外の地域を対象に制作した様々な地図の例を紹介する。個々の地図に込められたストーリーの背景は詳述し得ないが、いずれも既述の制作方法に基づいて着想・発案され、情報収集やグラフィック制作へと展開されたものである。

Portlandness に収録されている都市の間取図(図 1)は、類推によって様々な地区からなるポートランドを家として描いたものといえるが、図 14 は名古屋を例としてそれを野球場に当てはめたものである。ここでは、バッテリー(ピッチャーとキャッチャー)が都心、内野はその周辺、外野は郊外を指すものとして、それぞれのエリアに特徴的な地域をイラストで表現した。内外野や左右(東西)の位置関係は大雑把に現実の場所に対応する。都市(圏)を異なる機能をもつ地域が結び付いたまとまり(機能地域)と考える見方は地理学では一般的であるが、この地図はそれを「チーム」のイメージで可視化したものである。



図 14 野球場で描く名古屋

間取図のような比喻や類推を交えた想像力とは異なるものの、私たちが普段イメージしている場所や空間は認知地図（またはメンタルマップ）として描くことができる。認知地図は Cultural Atlas によく利用される。Cultural Atlas が重視する自分と地域との関わりは、普段頭の中でイメージしている情報を取り出した認知地図にうまく反映されるからである。ランドマークが認知されづらい仙台（図 11）とは異なり、東京には誰しもが知っている新旧のランドマーク（東京タワーと東京スカイツリー）がある。ただし、その位置を人々が必ずしも正しく認知しているわけではない（図 15）。特別区の範囲と山手線のみを示した地図の上に回答してもらったそれぞれのランドマークはある程度ばらついており、特にスカイツリーでその傾向が強いことがわかる。

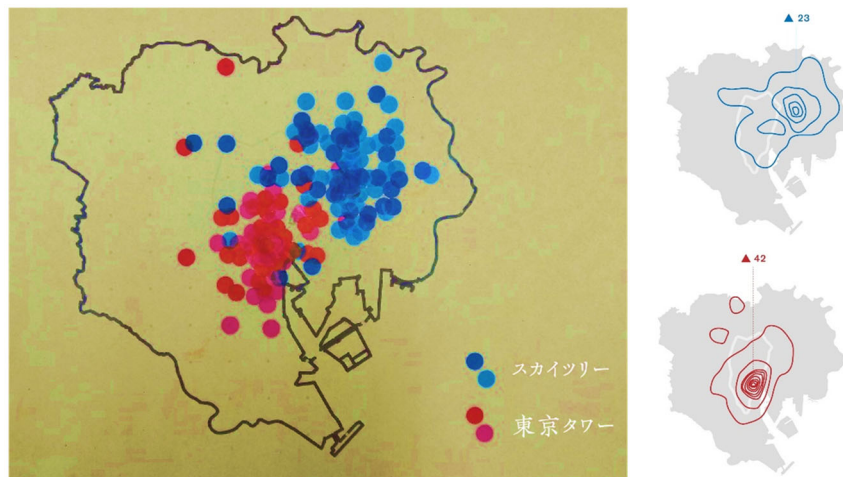


図 15 認知地図上の東京タワーと東京スカイツリーの位置

資料：クラウドソーシング上で実施した Web 調査（2020 年、n=87）

内部／外部の視点を組み合わせることで地域らしさに気づく例として、図 16 には京都の「いけず石」を地図化した。いけず石とは交差点の角などに置かれている石である。狭い街路を曲がる際に建物が傷つけられないよう敷地の隅に設置されるが、通行する車からは「いけず（=いじわる）」な存在として認知される。ここに、細街路や一方通行が多いという交通環境、また、石を置くことで敷地の境界を婉曲的に主張する文化などの「らしさ」を読むことができそうである。ただし、石を置いた本人や地域住民にとってはありふれた日常の風景であり、普段それを「京都らしい」ものとして意識することは少ないかもしれない。筆者自身も、京都で暮らしていた数年の間、一度もその存在に気づいたことはなかった。

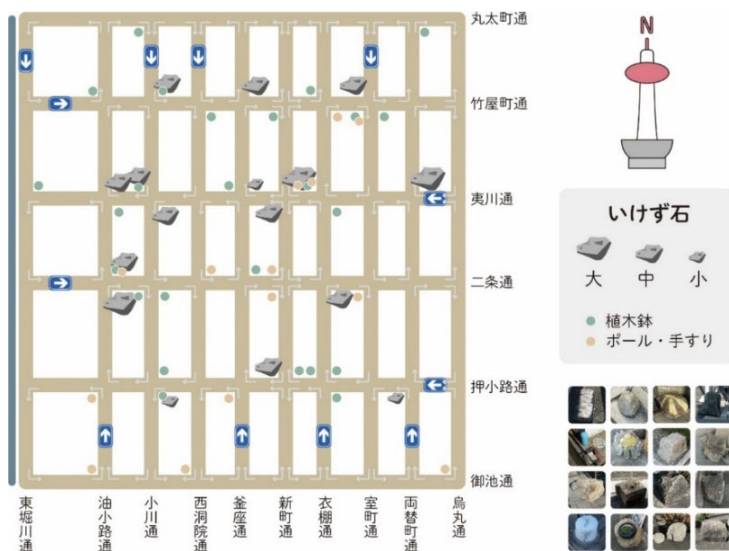


図 16 京都の「いけず石」

日常の風景に溶け込んでいて意識化しづらい要素は他にも数多くある。図 17 は、静岡市のある地区内に設置されたカーブミラーの位置を示した地図である。オープンデータをもとに「カーブミラー密度」を計算したところ、同地区が高い値を示した。実際に地図化してみると、ほとんどの交差点にカーブミラーが設置され、鏡に映らずにこの地区を通り抜けることは困難なほどである。見通しの悪い交差点にカーブミラーが設置されている状況は日本ではありふれた景観といってよいだろう。しかし、国や地域によって事情は大きく異なる。「外部」の視点で見れば、鏡に囲まれた街路景観もまたその場所らしさを構成しており、この地図はそれを物語る一枚である。



図 17 カーブミラーに囲まれた地区

資料：しずみち info オープンデータ

図 18 は、意図的に制約を課して都市・地域をとらえる試みの一つであり、ここでは雑多な街路景観から通り沿いの建物の色彩のみを取り出した例を示した。名古屋市大須の街路を Google Street View で仮想的に歩き回り、各建物正面から代表的な色を抽出した。色彩は何らかの街の特徴を反映しているのだろうか。伏見通の西側は主に住宅地であり、薄く落ち着いた色合いが広がる。有名な大須観音が位置する二丁目～三丁目の商店街沿いや東側にある大津通沿いの界限では、赤系統を中心に濃く鮮明な色彩が目立つ。様々な業種の店舗が軒を連ねる大須商店街は雑多な景観をもつ印象があるものの、その色彩の中に通りの「カラー」が浮かび上がっているように見える。

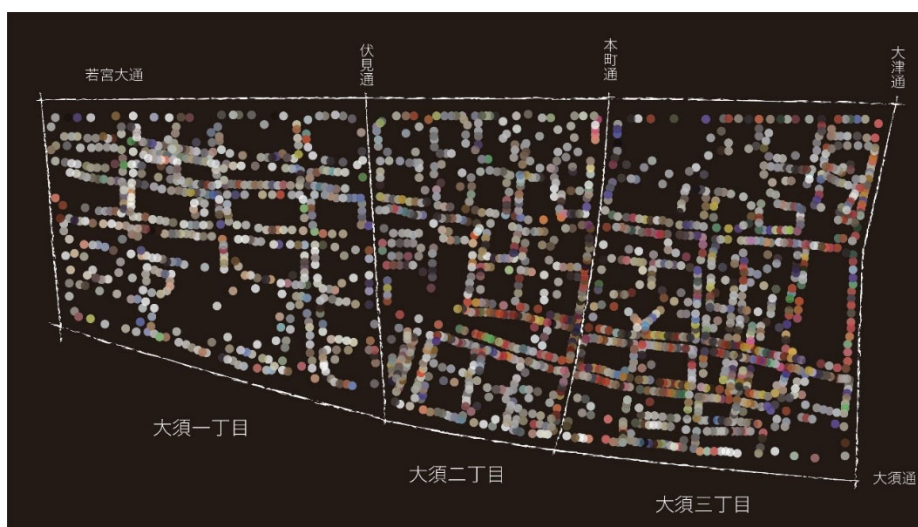


図 18 ファサードの色彩

資料：Google Street View

既述のとおり、筆者にとっての「名古屋らしさ」の感覚には、緑の存在を感じにくいという要素が多分に影響している。ただし、緑被率（上空から見える緑）にも緑視率（人の目線から見える緑）にも反映されにくいような「小さな緑」もある。住宅の周囲、時には街路にあふれ出した鉢植えの草花や木々がそれである。意識しなければ通り過ぎてしまうこの鉢植えの数をカウントしてみると、それが地区の世帯数より多いところもある（図 19）。これが公園・緑地や街路樹の緑を機能面で代替しうるものなのかはわからないが、こうした「小さな緑」にあふれた風景を描く地図は、緑の存在を感じにくいこの都市の「らしさ」をかえって強調しているようにも感じられた。なお、鉢植えのカウントには Google Street View を用いた。



図 19 街路から見える鉢植え

資料：Google Street View

図 20 も同じく名古屋（全市域）を対象とした地図である。道路網のラインのみが描かれているが、その色は「コーヒー店までの距離」に基づく。市内のあらゆる道路上からコマダとスターバックスまでの経路距離を計算し、そこからコーヒーを求めて向かうならどちらがより近いのかを描いた（赤=コマダに近い、緑=スターバックスに近い、黄色=ほぼ等距離）。この地図は、名古屋で繰り広げられるコーヒー店の勢力争いを、都心の繁華街と外縁部の大型商業施設に侵入するグローバルチェーンと、住宅地を拠点としてそれを迎え撃つローカルチェーン（ただし現在は全国展開）という構図で物語る。色分けの元になったデータは各店舗の位置であり、それ自体は事実を過ぎない。しかし、計算によって情報を加工・付加すれば、独自の喫茶店文化をもつ名古屋の食景観を「知識」を介して物語る地図を描くことができる。

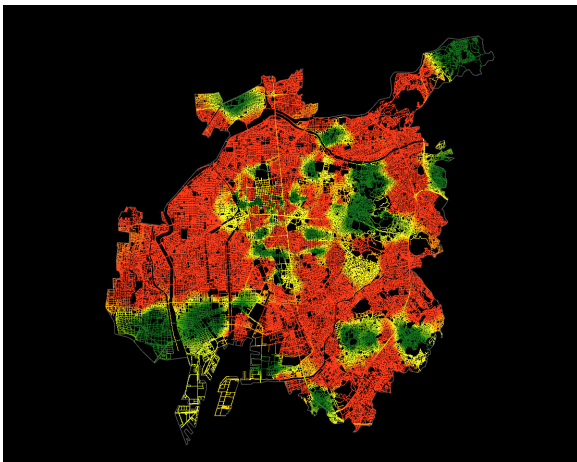


図 20 最寄りのコーヒーチェーン店

資料：ArcGIS Geo Suite 道路網 2021

Cultural Atlas には、GIS や Illustrator を用いて作られた精密な地図も多く含まれるが、ドーナツやビールの泡を素材に使ったり、様々なペンや筆を画材に用いたりしたアート作品のような地図もある。形状・色彩・模様などのデザイン要素を活用した制作方法と同様に、広い意味で意匠を凝らして制作する地図に分類できる。図 21 にはその一例として、ブロックを素材に用いて描いた名古屋を示した。東京や大阪とは異なり大規模なテーマパークが無かった名古屋で、大きな期待を集めて 2017 年に開業したのがレゴランドである。しかし同時期に市が実施した『都市ブランド・イメージ調査』では、魅力に欠け、買い物や遊びで訪問したいと思わないとの名古屋のイメージも話題となった。この地図は、そういった観光都市としての方向性を模索する名古屋を意図してレゴブロック風（使用したのはナノブロック）に描いたものである。なお 2022 年 10 月には、名古屋市営地下鉄とあおなみ線において、実際にレゴブロック製の路線案内図が登場した。



図 21 ブロックで描いた名古屋

図 22 はステンドグラスをイメージして制作した地図であり、長崎市の中心部付近を描いたものである。教会やキリスト教の歴史と関わりのあるステンドグラスは、様々な異なる色をもつガラスによって構成される。これを長崎に特徴的な素材として用い、一つ一つの面を街区に見立ててカラフルに着色するという地図デザインを考案した。ただし、制作のコストや難易度を考慮して、実際の制作はステンドグラスではなく「グラスデコ」を画材として代用している。一見するとジオデモグラフィクスのような小地域類型を示した主題図にも見えるが、水域を青系にしたこと以外、色の配置に特段の意味はもたせていない。

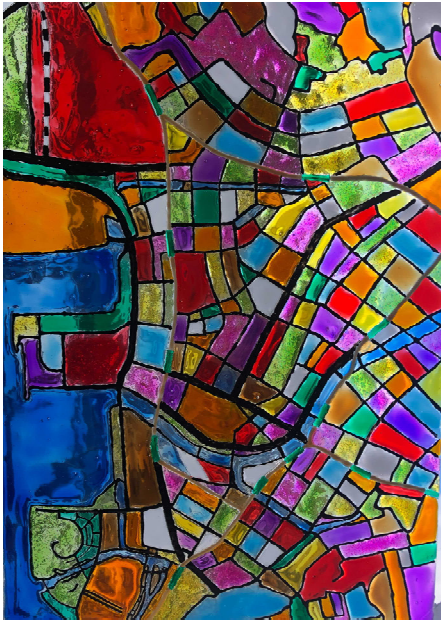


図 22 ステンドグラス風に描いた長崎

4-3. 地図作成ガイドの例

ここまでで紹介してきた Cultural Atlas の制作方法と実際に制作した地図のサンプルは、各都市・地域での地図帳づくりに役立つ資料となることが期待される。とはいえ、その自由度の高さゆえに最初のきっかけとなる仕掛けなしには着手しづらいことも予想される。そこで、既存の地図のアイデアを自分の地域に当てはめて、「このように進めればできる」という手順をまとめたガイドを作成した（図 23）。なお、Cultural Atlas に含まれるすべての地図があらゆる地域に応用可能とは限らないため（むしろその地域のみで可能な内容の地図が多い）、ここでは特に汎用性が高く、かつ応用もしやすい「間取図」（図 1）の制作を例に取り上げた。

このガイドでは、Step1 から Step5 までの順に何をするのかの大まかなプロセスを示し、イメージイラストと解説文、また記入欄を設けている。記入欄は紙幅の都合で小さく表示しているものの、実際には直接書き込んで制作を進められるよう、一定のスペースを設けることが望ましいだろう。図 1 のような都市を「間取図」に例えた地図を作成するとすれば、どのような工程が必要になるのか、また悩んだり迷ったりする可能性が高いのはどの部分なのかを考え、必要最小限の作業を五つのステップに要約した。「間取図」は多くの都市や地域に適用可能であり、誰にとってもなじみ深い図面であることや、部屋の種類に地域性を反映させることもできるなど、Cultural Atlas 制作の入口として優れた題材といえる。むろん、これ以外のものについてもガイドを整備することで、Cultural Atlas に関心をもつ人が実際に地図制作を始める障壁を小さくすることができるだろう。なお、図 24・25 は、実際に日本の都市を対象にこの「間取図」を制作した例である。

STEP 1. 「家」に見立てる地域を選ぼう		
	<p>基本は都市・地域（たとえば市町村）くらいの広さを「家」に選び、その中の各地区や広い建物・敷地、山・川などを「部屋」として考えてみよう。もっと狭い範囲でも、都道府県を超えるような広さでも、それを一つのまとまりとみなせるなら可能だ。「〇〇の玄関」「〇〇の居間」「〇〇の寝室」といった間取り図をイメージするのにピッタリくる地域（範囲）を選んでみよう。</p>	<p>家は… .. 部屋は… ..</p>
STEP 2. 各部屋に該当しそうな地域を探し出し、割り当ててみよう		
	<p>右の欄には、一般的な家によくあるタイプの部屋が並んでいる。これを参考にしながら、STEP1 で選んだ地域の地区・建物・地形などを「部屋」に割り当てていこう。解答は存在しないので、自由に想像力を働かせてほしい。ただし、選ぶ際には理由も考えること。二か所以上選んでもかまわないし、逆に該当ナシとなる部屋があっても問題ない。</p>	<p>玄関： 廊下： 台所： 居間： 寝室： 子ども部屋： バスルーム： その他… ..</p>
STEP 3. 他に特徴的な地域があれば、ふさわしい「部屋」に例えてみよう		
	<p>選んだ地域の中に、STEP 2 に並べた部屋タイプには例えにくい、しかし地域を語るうえで外せない特徴的な地区や建物がある場合は、むしろその場所に合う部屋を考えてみよう。その場所はなぜ特徴的なのか？を考え、それを家の中の部屋に例えたらどうなるか、と考えよう。勝手に新しい部屋を作るのも可能だ。</p>	<p>特徴的な地域？ 部屋でいうと？ その理由は？</p>
STEP 4. 部屋を並べて一つの「家」の間取り図を描いてみよう		
	<p>大きめの紙を用意して、間取り図を描いてみよう。正確な位置・形状でなくてよいが、なるべく現実の地理的な配置に近づけると見やすい間取り図になる。とはいえ細かなルールは必要ない。間取り図っぽくみえるように、図面のパーツを使って全体をデザインしてみよう。よく行き来するところをドアでつないだり、大通りを廊下にしたたりして、家らしくなるようにレイアウトしてみるとよい。</p>	
STEP 5. 完成した間取り図を眺めて、「わが家」のユニークさを見つけよう		
	<p>完成した「家」が住みやすいか考えてみよう。生活に必要な「部屋」は、わが家に揃っているだろうか？隣の家にあるのにわが家に無いものは？逆に、わが家の自慢となるような部屋はどれだろうか。同じ地域について複数の人（チーム）で作業した場合は、お互いがどう違って地域を想像したのかを見比べてみよう。どのようにリフォームしたらもっと住みやすくなるのかも話し合ってみよう。</p>	<p>「わが家」の自慢は？ 「わが家」の不満は？</p>

図 23 Cultural Atlas のページ作成ガイドの例

いう性質から、教育やアウトリーチとの接点も多いと考えられる。本研究において整理した制作方法および地図の例を起点として、これから各地域で独自の「地域らしさを描く地図帳」の制作が進んでいくことを期待したい。

謝辞

本研究は国土地理協会第20回学術研究助成（2020年度）「『地域らしさを描く地図帳』製作に関する研究」の支援を受けたものです。本研究を進める過程で、ポートランド州立大学地理学科のハンター・ショービー氏とデービッド・バニス氏には終始ご協力頂きました。『『地域らしさを描く地図帳制作プロジェクト』に参加して下さった方々、特に、清水遼さん（図10,11,12,16,19）、植田雄登さん（図6,25）、松村玲央さん（図12,24,25）、坂本秀祐さん（図6,9）、渡邊怜央さん（図6,9,12,22）、北條雄大さん（図12）、伊藤裕貴さん（図9）、横山由奈さん（図12,20,21,22）、宮嶋愛菜さん（図21）、細田茜音さん（図21）、村中亮夫さん（図15）、松本優希さん（図15）、山本涼子さん（図17,18）には、地図の発案からGIS上の作業まで様々な場面で助けて頂きました。また地図およびガイドのイラストは中嶋伸恵さん（おでかけカンパニー）にご担当頂きました。以上の方々のご協力に、心より感謝申し上げます。

文献

- 池田千恵子 2018. ポートランド市パール地区における再生と社会的構成の変化. 都市地理学 13: 48-62.
- 北 雄介 2018. オノマトペを用いた街歩きによる都市の様相の記述と分析. 日本建築学会計画系論文集 83(749): 1285-1295.
- 佐々木宏幸 2020. まちづくり研究 ネイバフッドから都市を考える(3)ポートランド—200フィート角の街区と先進的まちづくりが生み出した全米一の人気都市. 家とまちなみ 39(2): 68-74.
- 吹田良平 2010. 『グリーンネイバフッド—米国ポートランドにみる環境先進都市のつくりかたとつかいかた』 織研新聞社.
- スベック, J. 著, 松浦健治郎監訳 2022. 『ウォークブルシティ入門—10のステップでつくる歩きたくなるまちなか』 学芸出版社.
- 手描き地図推進委員会編 2019. 『地元を再発見する! 手書き地図のつくり方』. 学芸出版社.
- 畢 滔滔 2017. 『なんの変哲もない 取り立てて魅力もない地方都市 それがポートランドだった—「みんなが住みたい町」をつくった市民の選択』 白桃書房.
- 畢 滔滔 2020. オレゴン州ポートランド市のジェントリフィケーション. 立正経営論集

52(2): 1-16.

- 宮副謙司・内海里香 2017. 『米国ポートランドの地域活性化戦略—日本の先をいく生活スタイルとその充実』 同友館.
- 山崎満広 2016. ポートランド—世界で一番住みたい街をつくる. 学芸出版社.
- リンチ, K. 著, 丹下健三・富田玲子訳 2007. 『都市のイメージ[新装版]』 岩波書店.
- Banis, D. and Shobe, H. 2015. *Portlandness: A Cultural Atlas*. Sasquatch Books. バニス, D.・ショービー, H. 著, 埴淵知哉・花岡和聖・松本文子・高松礼奈訳 2018. 『ポートランド地図帖—地域の「らしさ」の描きかた—』 鹿島出版会.
- Berry, J. K. and McNeilly, L. 2014. *Map Art Lab: 52 Exciting Art Explorations in Mapmaking, Imagination, and Travel*. Quarry Books.
- Cheshire, J. and Uberti, O. 2014. *London: The Information Capital*. Particular Books.
- Cooper, B. 2013. *Mapping Manhattan: a love (and sometimes hate) story in maps by 75 New Yorkers*. Abrams Image.
- Desclaux-Salachas, J. 2017. *Art of Cartographics: Designing the Modern Map*. Goodman.
- Hatfield, T., Kempson, J. and Ross, N. 2018. *Seattleness: A Cultural Atlas*. Sasquatch Books.
- Johnson, B. 2022. *The Pearl District: Placemaking From The Ground Up*. Pearl Light Publishing.
- Kühne, O., Jenal, C., Sedelmeier, T. (eds). 2022. *Cultural Atlas of Tübingenness: Kleine Karten aus dem großen Tübiversum*. Springer VS.
- Nepp, A. 2019a. *Curious city—In, out, above, beyond: A Cultural Atlas of Saint Paul, Minnesota*. Macalester College
- Nepp, A. 2020. *Meandering Minneapolis: A cultural atlas*. Macalester College
- Shobe, H. and Banis, D. 2021. *Upper Left Cities: A Cultural Atlas of San Francisco, Portland, and Seattle*. Sasquatch Books.
- Solnit, R. 2010. *Infinite city: a San Francisco atlas*. University of California Press.
- Wood, D. 2010. *Everything sings: maps for a narrative atlas* (1st ed.). Siglio.

(動画)

- Nepp, A. 2019b. The Making of a Cultural Atlas. <https://youtu.be/CityMTbnPZM> (最終閲覧日: 2022年11月25日)
- Nepp, A. 2021. Building a Cultural Atlas. <https://youtu.be/NN0hZ8HhH8E> (最終閲覧日: 2022年11月25日)
- Shobe H. 2015. Portlandness: A Cultural Atlas - Hunter Shobe: PDXTalks. <https://youtu.be/-fpm821A> (最終閲覧日: 2022年11月25日)
- Shobe H., Banis D., van Belle Z., Gibson G, Arakawa S. 2021. Hunter Shobe & David Banis present Upper Left Cities. <https://youtu.be/u2326bNTrgs> (最終閲覧日: 2022年11月25日)